

美しい故郷を守り未来につなぐ

山口県漁業協同組合蓋井島支店 潮さい倶楽部
大空 富士枝

1. 地域の概要

私の住んでいる蓋井島（ふたおいじま）は、島の面積が2.32km²、周囲10.4kmの響灘に浮かぶ小さな島である（図1）。下関市の吉見漁港から定期船蓋井丸が冬場は1日2往復、夏場は3往復運航しており、片道約40分で本土と結ばれている。

島は緑に覆われており、神様の霊が宿ると言われる4つの「山の神の森」では、7年ごとに市の無形文化財である「山の神行事」が島民総出で執り行われている。

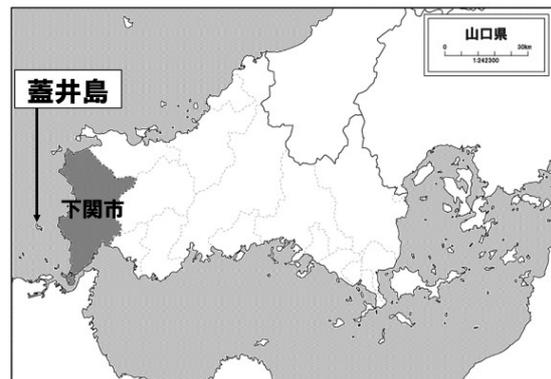


図1 山口県下関市の位置図

2. 漁業の概要

山口県漁業協同組合蓋井島支店の正組合員数は23人、准組合員数13人である。主な漁業は、大型定置網漁業、一本釣り漁業、採介藻漁業などで、令和4年の水揚げ量は約165トン、水揚げ金額は約1億円であった。

3. 研究グループの組織と運営

潮さい倶楽部は、平成10年にそれまであった漁協女性部を改名した組織で、30代から70代までの総勢15人の部員が所属している。

主な活動は、島内の環境整備、防災活動、島の情報誌の発行、地域行事への参加などである。

4. 研究・実践活動の取り組み課題選定の動機

自然に恵まれた彩り豊かな島では、30年前、嫁がくる島、ベビーブームに沸く島としてとてもにぎわっていた。しかし、30年前には163人であった人口は、高齢化や漁業離れで次第に減少し、現在では85人に

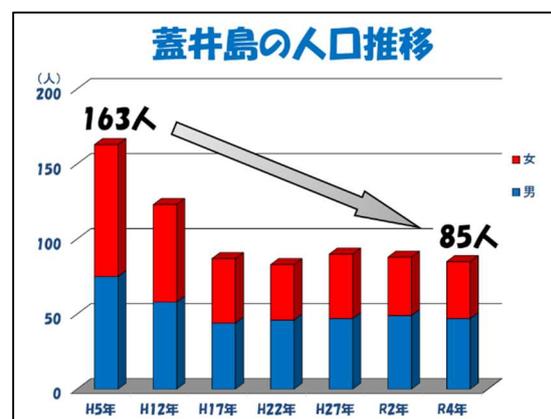


図2 蓋井島の人口推移

なってしまった（図2）。

人口の減少、漁業離れで島の活気が失われ「私たちの島はどうなるのだろう」と不安感に襲われた私たちは、平成10年に漁協女性部を「潮さい倶楽部」と改名し、「私たちが島を支え続けるんだ」という気持ちを新たにしました。島を活気づけよう、島民の皆に元気になってもらおう、この美しい故郷を未来につなげていこうとの思いから、潮さい倶楽部として、漁協という枠を越えて島の活性化に向けた活動を行っていくこととした。

5. 研究・活動状況および成果

（1）島内の環境整備

海岸通りの草刈り、清掃作業を年に7回行っている。また、花壇には季節の花を絶やさないように心がけており、四季折々の花でいつもにぎわっている。季節ごとに変わる島の風景は島の生活そのものであり、大切にしていきたいと思っている（写真1）。



写真1 清掃作業

（2）防災活動

島は本土から離れていることから、何かあったときに島を守るのは住民の私たちである。このため、潮さい倶楽部には「防災班」を設けており、防災機器などの取り扱い講習を受けたり出初式に参加したりして万が一に備えるとともに、普段から防災意識の向上に取り組んでいる。火災や災害に強い安心・安全な島づくりのための大切な活動である。

（3）情報発信

潮さい倶楽部では情報発信も行っている。高齢化が進むにつれて、一人暮らしの高齢者が増えるのはどこも同じであろうが、「この人たちに元気に過ごしてほしい」「楽しい話題を提供したい」「会員相互の情報交換をしよう」という思いから始めたのが島新聞である。平成6年に創刊し、「潮さい」と名付けた島新聞は、28年間続いている島の人気情報誌である。新聞の記事やイラストは全て手作りで、島の出来事や季節の風景、いろいろな年代の人たちのコメントや地元でとれる食材を使ったレシピなどを載せたものを、2カ月に一回発行し、全世帯に配布している（図3）。

新聞作りは大変であるが、一人暮らしの高齢者の家に行くと私たちが作った新聞が飾ってあり、「いつも楽しみにしちよるよ」と声をかけてもらえる。こういった言葉が私たちの励みになっている。



図3 島新聞（潮さし）

また、島外の方に向けた情報発信も行っている。蓋井島には釣り客のほか、蓋井島を散策する人も訪れるが、島には来島者が喜ぶような土産もなければ、島のことを知ってもらう機会もない。せっかく島に来てもらったのであれば蓋井島のことを知ってもらいたい、喜んでもらいたいという思いから、島内唯一の売店であるみなと屋に「蓋井島コーナー」を設置している（写真2）。

「蓋井島コーナー」には四季折々の島の風景の写真や、島の特産物であるヒジキ、島民が作った商品などを展示・販売している。島を訪れた人がこの蓋井島コーナーで足を止め、展示物を笑顔で眺めている様子は大変うれしいものである。

自分たちにとって当たり前だった島の風景や島の時間は、島外の方には新鮮に感じるようで、「蓋井島はきれいですね」「ゆっくり流れる時間がいい」「島の人はみんな笑顔」「島外の私たちを家族のように迎え入れてくれる」と言ってもらえる。皆さんからの温かい言葉を聞くたびに、私たちの島は豊かな宝の山であることを気づかされ、「この美しい故郷を守っていこう」と再認識をすることが私たちの活動の原動力にもなっている。



写真2 蓋井島コーナー

(4) 若い部員の意見導入

潮さい倶楽部の活動を行う中で、気をつけていることがある。それは若い部員の声をよく聞き、活動に反映させることである。30代から70代までの幅広い年代がそろっているのはよいことだが、一方で若い部員が遠慮して意見を言いにくいこともあるからだ。秋祭りでは、若い部員のアイディアを取り入れ、パン販売を行った。また、売店内にある「蓋井島コーナー」も若い女性部員が飾り付けなどを行っている。

活動に新しい風を吹かせてくれる若い部員の意見はとても重要である。島を守り、未来につなげていくためにも、若い部員の視点、意見を大切にして、共に楽しく活動を続けていきたいと思う。

(5) 島特産品製造

島売店内にある「蓋井島コーナー」では島特産品のヒジキを展示、販売している(写真3)。島のヒジキは一番刈りの芽ヒジキのみを使用しているため、柔らかい中にもコシがあり、かむほどにヒジキの風味が口中に広がる自慢の一品である。

この絶品ヒジキを作っているのが私たち女性部員である。女性部員が力を合わせて一緒にヒジキを刈り取り、その後は付着物の除去、天日干し、釜ゆでを繰り返し、完成までに8日間かかる。

この私たちが作る自慢のヒジキが令和3年にふるさと納税の返礼品「蓋井島特撰品 極一級ヒジキ」として採用されることとなった(写真4)。ヒジキをお届けする際には、生産者である私たちの手紙とオススメレシピ、島の案内冊子を添えている。島を訪れたことがない人にも、自宅で蓋井島の雰囲気但至少でも感じてもらいたい。さらにこのことが、今流行りのSNSを通じてバズれば、島への観光客も増えるのではと少しだけ期待している。



写真3 島特産品ヒジキ



写真4 蓋井島特撰品 極一級ヒジキ

島にはほかにも特産品がある。それはカジメ(正式には「アラメ」という海藻)である(写真5)。島では刈り取ったカジメを天日で干して、細かく刻み、ご飯に乗せたり、みそ汁に入れて食べている。

島特産品のカジメだが、平成25年の異常な高水温により島周辺のカジメは枯死、壊

滅状態となり、島からカジメが消えてしまった。壊滅状態から7年がたった令和2年、徐々に島周辺でカジメが見られるようになり、カジメ復活の兆しを感じられるようになったことから、島ではカジメ刈り取りの再開を検討し始めた。以前は各自がカジメを刈り取り加工していたが、少ない資源を有効かつ継続的に活用するためにカジメ加工グループを立ち上げ、カジメ資源を管理していくこととした。

グループの主なメンバーは女性部員であるが、カジメを刈り取る作業は男性漁業者に協力してもらっている。グループでは漁期前に、カジメを刈り取りすぎないように刈り取る量、場所を決めている。また、製品の品質安定を図るため、初年度は皆で加工作業を行い、加工方法を統一化した（写真6）。再び島特産品のカジメを心待ちにされている島外の方にお届けできるようになることをとてもうれしく思った。



写真5 島特産品カジメ



写真6 カジメ加工作業

6. 波及効果

島特産品のカジメは復活し始めているものの、資源量はまだまだ少ないのが現状である。今後も継続的に資源を利用していくためには、科学的根拠に基づいてしっかりとした資源管理を行う必要があると感じた私たちは、下関にある水産大学校の先生の協力を得て、令和3年から藻場の調査に取り組むこととした（写真7）。

年に2回の調査を行い、カジメ漁期前の1月ごろに調査結果報告会を行っている（写真8）。調査結果報告会にはカジメ加工グループ員である私たち女性部員と漁業者が集まり、活発に意見交換している。

調査結果を基に、今漁期のカジメを刈り取る場所、刈り取る量を検討しているが、残念なことに令和3年はカジメ資源の状態が良くなかったために刈り取りを断念した。皆さんにまたカジメをお届けすることができると喜んでいた矢先の出来事に、全員が意気



写真7 水産大学校と連携した藻場調査

消沈した。しかし、資源を守り後世につなげていくためには、カジメの刈り取り断念の判断は正しかったと思う。

また、水産大学校の先生の指導のおかげで、島民の藻場保全への意識がさらに一層強まった。



写真8 藻場調査報告会

7. 今後の課題や計画と問題点

前述のとおり、残った課題はカジメ資源の回復である。今後も、水産大学校と連携した藻場調査の結果に基づき、カジメ衰退が著しい場所の食害生物の集中除去やカジメの母藻投入などの活動にさらに力を入れていきたい。

島の人口は85人まで減少してしまったが、実は今、島では第二次ベビーブームが起きている。私たちの息子世代が島に戻ってきて、漁業を継ぎ、お嫁さんを迎え、新しい命が次々に誕生している。今、島は子供たちであふれており、85人が暮らす島で小学生以下の子供は12人である。島の若者(12歳以下)の人口比は14.1%と、全国数値10.0%を上回る割合となっている。

子供たちが島を駆け回り、笑い声、泣き声でにぎわっている様子は、皆を明るく、笑顔にしてくれる。この笑顔を絶やすことなく、子供から高齢者まで、もちろん私自身も明るく暮らせるよう、私たちにできることを探し続けたいと思っている。

若い人が増え新鮮な風が吹いている島(写真9)で、私たち潮さい倶楽部は、これまで自分たちが行ってきた活動に自信と誇りを持って、これからも美しい故郷・蓋井島を守り、未来へつなげていくための挑戦を続けていく。



写真9 蓋井島島民